

富永神社祭礼奉納

とき 平成二十七年十月九日(金)  
午後四時四十五分始  
ところ 富永神社 能楽殿

能

組

仕舞 経 飛鳥川 政 恩田衣恋  
紅葉狩 榎本奈月 伊藤紗佳

狂言 し びり 太郎冠者 本田朱麗 主人 近藤つばき

後見 天野雅夫

仕舞 俊成忠度 本田洋子  
芭蕉 岩崎葉子  
松虫 鳥居久仁子

小舞 忍ぶ其夜 清川松佐  
貝盡し 山口俊一

語り 二千石 大原正巳

シテ 中嶋康夫

能 杜 若 ワキ 櫻本泰朗

大鼓 河村総一郎 太鼓 鈴木崇史  
小鼓 永田聡子 笛 鹿取希世

後見 太田康弘 地謡 太田研司  
清水利高 高林呻二  
竹内声位 高林白牛口二

杉浦史佳 森田收  
長田共永

休 憩

狂言

萩大名

大名 水谷 至男

太郎冠者 佐野 泰三  
茶屋 小澤 貞博

後見 山口 俊一

独調 舟弁慶 中西 深雪

狂言

附

子

太郎冠者 山本

勝

次郎冠者 天野 雅夫  
主人 加藤 久和

後見 山口 俊一

シテ 杉浦 史佳

能 猩

々

ワキ 太田 研司

大鼓 櫻本 泰朗 太鼓 中嶋 康夫  
小鼓 伊藤 秀子 笛 鹿取 希世

後見 太田 康弘

地謡

鈴木 崇史 高林 伸二  
竹内 省吾 高林 白牛 口二  
長田 共永 森田 收  
清水 利高

(終了予定 九時頃)

主催 本町区

## 狂言 しびり (痺)

急な客人を接待するため、主人は召使いに酒の肴を買ってくるようお遣いを命じます。いつも扱き使われている召使いは、嫌気と怠け気分から、足が痺れて動けないのでお遣いに行けないと嘘をつき……。

能

杜かき 若つばた

諸国を巡る僧が、三河国に着き、沢辺に咲く今を盛りの杜若を愛でてしていると、ひとりの女が現れ、ここは杜若の名所で八橋やっはしというところだ、と教えます。僧が八橋は、古歌に詠まれたと聞か、と水を向けると、女は、在原業平が『かきつばた』の五文字を句の上に置き、「唐衣からころもき着つつ馴れにし妻つましあれば遙々はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」と旅の心を詠んだ故事を語ります。やがて日も暮れ、女は侘び住まいながら一夜の宿を貸そう、と僧を自分の庵に案内します。

女はそこで装いを替え、美しく輝く唐衣を着て、透額すきびたい（すきびたい）「額際に透かし模様の入ったもの」の冠を戴いた雅びな姿で現れます。唐衣は先ほどの和歌に詠まれた高子たかこ（たかこ）の後のもの、冠は歌を詠んだ業平のもの、と告げ、この自分は杜若の精であると明かします。

杜若の精は、業平が歌舞の菩薩の化身として現れ、衆生済度の光を振りまく存在であり、その和歌の言葉は非情の草木をも救いに導く力を持つと語ります。そして、伊勢物語に記された業平の恋や歌を引きながら、幻想的でつややかな舞を舞います。やがて杜若の精は、草木を含めてすべてを仏に導く法を授かり、悟りの境地を得たとして、夜明けと共に姿を消すのでした。

狂言

萩はぎ大名だいまう

訟事のため永らく在京していた田舎大名は、訴訟も無事に済み近々帰国することとなります。都の名残に遊山に出掛けようと召使（太郎冠者）に相談します。召使は、宮城野の萩が盛りの庭見物を提案しますが、その庭の持ち主は大の当座好き（即興の和歌を詠むこと）で、見物客に所望すると云います。歌を詠む嗜みのない大名に、召使は一計を案じ、和歌のカンニング法を伝授するのですが……。

狂言

附ぶ子す

主人は外出するにあたり、二人の召使いに附子を預けて、「これは吹く風に触れるだけでも滅却（死）に値するほどの猛毒だから、注意しながら留守番をするように」と云い付け出掛けます。残された召使いは怖々見張りながらも、段々と中身が気になって……。

本来は『毒』と書いて「ぶす」と読みます。現在では「附子」のほか「不須」の表記が伝承される流派もあり、また演出面でも両冠者の立ち位置が逆であったり、ぶすの食し方にも流儀・流派によって特徴の挙げられる演目です。

能

しろう  
猩

じょう  
々

中国の金山かんとんの麓ふもとに、高風こうふうという大そう親孝行で評判の高い男がいました。彼はある夜不思議な夢を見ました。それは楊子の市に出て酒を売ると、富貴の身になるというのです。その夢の通りになると、なるほど次第に金持になりました。ところで、市の立つごとに高風の店に来て酒を飲む者がいます。その男はいくら飲んでも顔色が一向に変わらないので、ある日その名を尋ねると、地中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで高風は、ある月の美しい晩、今度は潯陽しんようの江のほとりに出、酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。(ここまでの経過をワキ高風が一人で語り、能はここから始まります)やがて猩々は、葉の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をしたい、良き友と会う事を樂しみに、波間から浮かび出て、高風と酒をくみかわします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして、高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えてゆきます。

※仕舞とは能の一部を面・装束をつけず、紋服・袴のまま素で舞うこと。能における略式上演形態の一種で、伴奏は地謡のみによって行われる。演者は最初の一句を座ったまま謡い次に立ち上がって舞い、最後に打ち込みと呼ばれる型を行って座って一曲を終える。